

はじめに

のっけから私事で恐縮ですが、筆者は旅行が大好きです。ただ、その楽しみ方はちょっと変わっていて、滞在中に足を運ぶのは、地元のスーパーマーケットやデパートの食品売り場。つまりは食いしん坊なのですが、お土産物売り場にはない、その土地ならではのお惣菜を見つけては胸を躍らせ、珍しい食材や調味料に目を丸くし、物価の違いに思いを巡らす……。観光客向けの「よそ行きの顔」ではない、そのまちのほんとうの表情にふれることができたようで、小さな発見を楽しみとしているところです。日本の社会は戦後の経済成長とともにかつては地域ごとに見られた個性を失ったといわれますが、それでも、まちの「らしさ」のすべてが失われたわけではない、ということを実感しています。読者が暮らすまちにも、そんな愛すべき「らしさ」はありませんか？

いま、そのような「らしさ」の受け皿である地域社会が、数々の問題に直面して揺れ動いています。人口減少、少子高齢化、基幹産業の衰退、寂れる中心市街地……これまで経験したことのない危機を前に、まちの将来を案じている人は少なくありません。

でも「ピンチはチャンス！」ともいいますよね。実際、まちの景色が変わりつつあります。地域の担い手といえばその土地の名士＝主に中高年の男性であったところに、若い人たちや女性などこれまであまり前面に立つことがなかった人たちも加わった、新しい、そして面白い試みが各地で生まれています（共同通信社編 2017）。そのような試みの担い手たちは、多くの場合、資金や政治力とは縁が薄いため、頼りになるのはまずアイデア。思うようにはいかないこともたくさんあるでしょうけど、そういう活動に関わる人たちはどこか楽しそうでもあります。

読者にも、「何とかならないかな」という悩みごとや、「こうすれば解決できるのでは」といった面白いアイデアがあるのではないのでしょうか。「何とかならないかな」と解決の余地を探し出し、知恵を出し合い、ともかく始めてみる。そんな面白そうなことが各地で始まっていることを知ってもらいたい、という思

いのもとに、筆者たちはこのテキストを企画しました。

このテキストを編集するにあたっては、5つのことを意識しました。1つ目は、学問分野の「タテ割り」を乗り越えることです。1冊の本のなかに町内会のことから地方財政の話まで盛り込んでいるのはそのためです。結果、このテキストは既存の学部のいずれの枠組みにもおさまっていませんが、分野のなかにおさまりよくまとめることよりも、地域のことを幅広い視点からとらえることを優先しました。

2つ目に、通常、地方自治のテキストには必ずしもとりあげられない、近時の社会の変化に注目しました(第Ⅱ部)。わたしたちはこの本の主な読者として18～20歳という年齢層を意識しました。この世代にとっては、社会にも経済にも元気がないことは、物心ついて以来ずっとそうであった、という意味で、「当たり前のこと」そして「変わらないもの」のように受け取られているのではないか、また著しい所得格差の発生など、厳しい社会経済的な現実に対して本人の「自己責任」の一言で向き合おうとしているのではないか、ということを老婆心ながら案じています。しかし、その現実の多くは社会の変化から生じているのであって、「(努力しなかった)本人の責任である」などといたずらに個人の努力や姿勢に還元することは評価として不当であること、またそうであればこそ、その現実には市民の協力や政治行政による取り組みによって解決の余地があることを呼びかけたいと考えました。

3つ目に、記述の対象として、中山間地域や工業都市などを意図的にとりあげました。大学教員の一人として実感している点ですが、大学生の多くは都市(およびその周辺地域)生まれの都市育ちのため、いわゆる「田舎」への関心や予備知識に欠けるきらいがあります。ただ、そのような地域に顕著な人口減少や活力の低下といった現象は「田舎」ととどまらず、遠からず都市部でも見られるようになっていわれています。おそらくは読者が知らないであろう社会の一面を知ってもらうため、またこれから直面することが予想される危機の一端を知ってもらうため、加えてもう1つ、その危機にどう向き合えばいいのか考えてもらうために、「田舎」のことをとりあげました。

4つ目に、地域の担い手として、市民や企業など多様な存在をとりあげました(第Ⅰ部)。行政や議員たちだけではなく、さまざまな立場の人が関わらなけ

れば現在の社会問題の解決は覚束なくなっているからです。市民も企業も、そして政府も、それぞれに強みと弱みを持ちます。単独では難しいことも、それぞれの強みをかけ合わせることによってできることが増えてくるのではないかと、という点を強調したいと考えました。

最後に、地方自治のテキストにあっては本来中心的内容である政府セクターについては、とりあげ方に工夫をしました。読者のなかには、市役所をはじめとする地方の行政機関のことを、「住民サービスや事務仕事などを担当する組織」と理解している人もいるのではないのでしょうか。そうではなく、これらは議会とともに自治体における「政府」を構成している存在であること、そして地域社会における課題を解決するためには、この政府をうまく使うことが有効であること、を強調したいと考えました。なぜならば、政府は強制力のあるルールを制定したり、税金という巨額の資金を動かしたりできるのですから、これをわたしたちがほんとうに必要なと思うことに利用できれば、大きな力になるからです。政府を使いこなすために知っていると役立つことをとりあげよう、という観点からの記述を心がけました。

以上の方針のもと、詳しく、というよりも、むしろわかりやすく読み進めてもらえることを優先して記述に努めました。本書をきっかけに、地域とこれが抱える問題への見方が少しでも変わることがあったならば、執筆者一同うれしく思うところです。

本書の刊行にあたっては、前作『ローカル・ガバナンスとデモクラシー』に引き続き、法律文化社の上田哲平氏にたいへんお世話になりました。記して、感謝の意を表します。

2018年1月

編者 上田 道明